

頼家の面ふたつ

岩本 貴

要旨 伊豆に源頼家の面がふたつ伝わる。伊豆市修禅寺の「頼家の仮面」と伊豆の国市光照寺の「源頼家公病相の面」。ふたつの面には似た伝承が残されている。種種語られていることを集めてみると、鎌倉～南北朝期の文献との類似性を持ち、ストーリーに大同小異・大異小同あること、面のことは江戸中期まで遡り、いま未確認の面の存在の可能性すらうかがえ、悲劇の將軍頼家を慕う伊豆ならではの有り様を知ることができる。

キーワード 頼家の仮面 源頼家公病相の面 修禅寺 光照寺 信光寺

1 はじめに

伊豆に源頼家の面がふたつ伝わる。そのひとつ、伊豆市修禅寺の「頼家の仮面」は、岡本綺堂のフィクション「修禅寺物語」のモチーフになったことであまりに有名だ。いまとつは、伊豆の国市光照寺の「源頼家公病相の面」。ふたつの面には、類似した伝承が残される。それは、鎌倉を追われ、伊豆国修禅寺に下向し、わずか1年足らずで落命した頼家悲劇の物語りに彩られている。



図1 関連寺院位置図（静岡県GIS）

2 頼家の修禅寺下向と死

『吾妻鏡』（文2、註1）によれば、頼家は、建仁3年（1203）9月29日、伊豆国修禅寺に下向する。その約1年半前、建仁2年（1202）3月頃から彼は体調不良となり、同年6月10日に狩りに出かけた駿河から鎌倉に戻り、7月18日に北条時房らと蹴鞠をした2日後、再び体調が悪化し、「御心神辛苦、直也事に非ず」という状態に陥ったという。8月27日危篤状態と判断され、関西38カ国の地頭職を弟の千幡（実朝）が、関東28カ国の地頭職と惣守護職を嫡男の一幅が継承した。

頼家の外戚である比企能員は、その相続に憤怒したという。その直後9月2日にいわゆる比企能員の変が起こり頼家の外戚として権勢を誇った比企一族及び頼家の嫡男・一幅が落命する。9月5日危篤状態を脱した頼家は能員の変を知り激怒、能員と対立していた北条時政を討とうとするが果たせず、7日に落飾、鎌倉殿は千幡（実朝）に変わり、頼家は29日に修禅寺に下向した。下向から1年足らずの元久元年（1204）7月18日修禅寺にて死去した。享年23才。吾妻鏡には、頼家死の知らせが飛脚により届けられたことを記すのみ。

3 面のこと

（1）修禅寺「頼家の仮面」写真1－1

飛び出した目、むき出しの歯牙、額や頬の皺の造形は舞楽の納曽利面に似るが動眼、吊顎でない。杉材だという。額の上縁、鼻下、顎に植毛の穴がみられる。寺宝。修禅寺宝物殿で公開される。

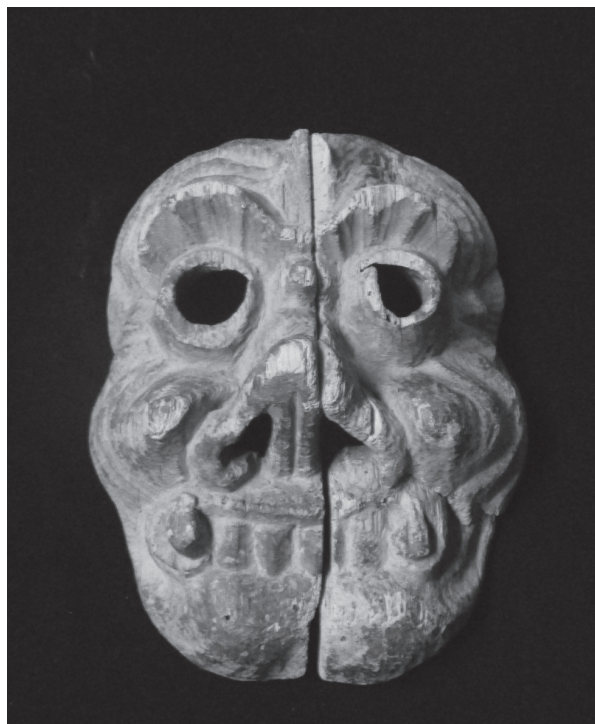
法量 縦33.6cm、幅25.6cm。

類例に乏しい。岐阜県郡上市白鳥町二日町の八幡神

社の納曾利面（写真2-2）は、額や頬の皺、開口するが牙を表現すること、動眼、吊顎でないこと、鼻下、顎に植毛の穴がみられる点は「頼家の仮面」に近いとも言える。法量 縦 24.3 cm、幅 17.5 cm、布張り、黒漆塗り。南北朝期の作と考えられている（白鳥町

1997）。地方で制作された変容が進んだ舞楽面の一例として紹介しておく（註2）。

仮面の調査にあたった牧野隆夫氏は、3Dプリンターによる仮面の復元作業を行う際、九州国東半島に伝わる修正鬼会の災払鬼の面（写真2-3）に類似す



1 修禅寺「頼家の仮面」



2 修禅寺「頼家の仮面 復元品」



3 光照寺「源頼家公病相の面」



4 光照寺「源頼家公病相の面」(裏面)

写真1 頼家の面ふたつ（1・2：筆者撮影、3・4：伊豆の国市提供）

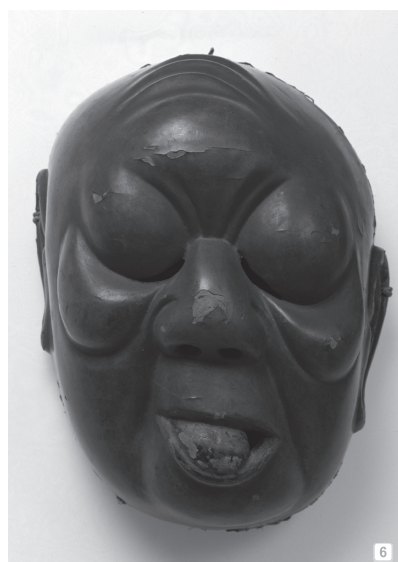
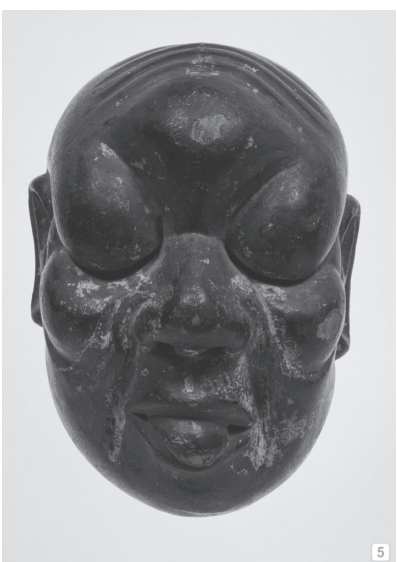
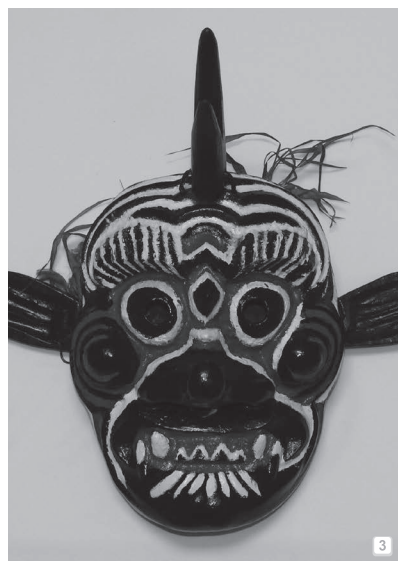
るものと推測し、額に角を復元する（写真1－2）。仮面は放射性炭素C14による年代測定にかけられ、1079-1154年の結果が出た（註3）。頼家の存命期間（1182-1204年）との齟齬がある。

（2）光照寺「源頼家公病相の面」 写真1－3・4

まぶた、頬など顔中が腫れ上がり、口を開け苦悶の表情をした面だ。『光照寺旧記 御面之由来』（文12、

以下『光照寺旧記』）によれば、「北条氏悪計に依て頼家公を廃しなきものにせんがため、わざと重患の容貌に彫刻し七日毎に鎌倉へ送りし最終の面相」だという。舞楽の二ノ舞の腫面に酷似する。寺宝。非公開。

法量 縦 34.0 cm、幅 24.5 cm。頭頂部から左顎にかけて割れたため補修されている。裏面縁辺部は左耳付近を除き欠損しており、右裏側面の欠損が大きい（写真1－4）。漆塗り。漆は、縁辺部欠損面にも塗布さ



- ① 納曾利面 鎌倉期 14 世紀 東京国立博物館
- ② 納曾利面 南北朝期 14 世紀 郡上市二日町八幡神社
- ③ 災払鬼 時期不明 国東市岩戸寺
- ④ 納曾利面 寄贈品 東京国立博物館
- ⑤ 腫面 12-13 世紀 奈良国立博物館
- ⑥ 腫面 鎌倉期 13-14 世紀 東京国立博物館

写真2 舞楽面の類例

（1・4～6：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp>)、2：白山文化博物館提供、3：国東市教育委員会提供）

れているから後世に塗布または重ね塗りされたもの。制作年代は不明だ。腫面の類例は古今東西枚挙にいとまがないが、東京国立博物館、奈良国立博物館所蔵の鎌倉～室町期の腫面を参考品として掲げる（写真2－5・6）。参考品2点と比し小鼻、鼻の穴、舌の造作などが簡素となるが時期差を示すかは不明だ。

4 面の顛末

頼家の面にまつわる伝承は様々な文書に記され（表1・2）、大同小異・大異小同ある。

（1）『伊豆志』文8 享保12年（1727）

ア 修禅寺

靈宝として様々な文書・器物とともに「頼家悪疾ノ面形一つあり。」と記され、享保年間に既に悪疾の面との伝承があったことがわかる。管見では修禅寺の面

を記した最古の記述となる。

イ 光照寺

「頼家面形当寺二面あり」とあって、翻刻に誤りがないければ、現存する面以外にもう1面存在していたことになる（註4）。修禅寺同様、光照寺の面を記した最古の記述だ。

ウ 信光寺

頼家の病状を伝えるべく顔色の善悪を面に写して7日おきに計3面鎌倉に送った。使者の信光は鎌倉への道中、（信光寺付近で）頼家の死を知り、寺に走り腹を切ったとある。

（2）『信光寺縁起』文9 寛政二年（1800）以前

武田信光が鎌倉から頼家の病状伺いに向かう途中で頼家の死を知った。信光は出家し、守山（伊豆の国市

表1 修禅寺「頼家の仮面」関連文書

享保12年 (1727)	『伊豆志 全』巻之五（文8） 「修善寺靈宝」 頼家悪疾の面形一つあり。
寛政2年 (1800)	『豆州志稿』巻ノ十 佛刹 上（文10） 「肖蘆山修禅寺」 （中略）寺二爪起ノ名號、僧日蓮自筆ノ法華經、假面、象鑪、北條氏ノ文書十餘章ヲ蔵ム
嘉永7年 (1854)	『修善寺文書』（文11） 「建仁三年之始 頼家卿之修禅寺入湯記 略草」 （前略）遠江守かふくしん〔腹心〕の者をつけ置き温泉の湯口よりうるし〔漆〕を流しけるゆへ禅室の御身につかふれさせたまひて御顔も日にまし、はれたゝれさなから二ノ舞の面のよふにならせたまひけるを、なけかせたまひて自〔ら欠力〕御面をうつさせたまひて尼御臺の御許へしん〔進〕せられし御面なりとて今に寺寶の中に在り。（後略）
明治44年 (1911)	『岡本綺堂隨筆集』（文13） 「修禅寺物語 明治座五月興行」明治44年（1911）5月5日 （前略）修禅寺に参詣して、宝物をみせてもらったところが、その中に頼家の仮面というものがある。頗る大きいもので、恐く舞臺の面かと思われる。 頼家の仮面というのは、頼家所蔵の面という意味か、あるいは頼家その人に肖せたる仮面か、それは判然解らぬが、多分前者であろうと察せられる。 私が滞在していた新井の主人の話に拠ると、鎌倉では頼家を毒殺せんと企て、窃に怪しい薬を侑めた結果、頼家の顔は（中略）爛れた。 その顔を仮面に作らせて、頼家はかくの通りでござると鎌倉へ注進させたものだという説があるそうですが、（後略）
昭和34年 (1959)	『修禅寺史料集 一』（修善寺町1959） （前略）修善寺には頼家が自ら醜い顔を面に写させ後世に残したとか自ら此の面をつけて鎌倉をのろい舞い狂ったか云う伝説も残っている。（中略）植田友一氏によれば此の面は林の中に捨てられてあったものを最近修禅寺に納めたものだとか云う、然し頼家に関係ある面が修禅寺にあったことは伊豆志に明文があるので一時林の中に捨てられたものかもしれない、（中略） 鎌倉の討手が押寄せた時頼家は丁度入浴中だったので修禅寺の僧が笹の葉に血で書いて湯本から流し込んで頼家に知らせたと云う伝説がある。（後略）

守山)の麓に庵を結び遁世した。とある。これは、後述する『豆州志稿』に引用された記述だ。よって『信光寺縁起』は、『豆州志稿』以前に成立したものであることは確かだが、成立年については明らかでない(註5)。

(3)『豆州志稿』文10 寛政二年(1800)

「假面」(修禪寺)、「古假面一ヲ蔵ム」(光照寺)とのみ記され頼家にまつわる記載はない。『伊豆志』から光照寺の面の数が減じている。

信光寺の項には、地元の伝説として、修禪寺の温泉に入る頼家に北条氏は人に命じ漆を湯に入れた。頼家は全身が漆でかぶれ、顔は醜くなった。北条氏は、これは悪い病気に違いないとし、政子は頼家の顔を面に

写して鎌倉に届けるよう命じた。使者の信光は、その面を持ち鎌倉に向かう途中で頼家の死を知り命を絶った。とある。また、前述の『信光寺縁起』を引用して信光が出家した異説も紹介している。

(4)『建仁三年之始 頼家卿之修禪寺入湯記 略草』文11 嘉永7年(1854)

時政が腹心に命じ頼家が入っている温泉の湯口から漆を流し入れたために頼家の顔、身体がかぶれた。顔は腫れ爛れ二ノ舞の面のようになった。頼家はその顔を面に写させ、政子のもとへ届けた。その面が現在寺宝になっている。と記される。文書中の「二ノ舞の面のよふにならせたまひける」の記述が興味深い。いま修禪寺に伝わる「頼家の仮面」は、二ノ舞の腫面では

表2 光照寺「源頼家公病相の面」関連文書

享保12年 (1727)	『伊豆志』巻之三(文8) 「信光寺」 当寺は曹洞宗也源頼家病によつて修善寺に入湯ありしとき三七日三面づつ顔色の善悪を面形に作寫して鎌倉に送られける然るに頼家ノ進士信光と云者件の形を持つて鎌倉へ行けるが頼家を浴室の内にて害すと聞しかは道より還りけるか其説紛れあらざれば此寺に走り入跡のこと悉く頼みをき腹切て死けり故に信光寺と号す。 「無量山光照寺」 当寺は浄土宗の靈地田方の一ヶ寺也頼家面形当寺二面あり。
寛政2年 (1800)以前	『信光寺縁起』(文10) 伊澤信光鎌倉ヨリ頼家ノ病氣伺ヒニ往ク此ニシテ其変ヲ聞キ祝髪シテ守山ノ麓ニ庵ヲ結ヒ遁世シ文暦元年二月二十五日年七十五ニテ病卒ス
寛政2年 (1800)	『豆州志稿』巻之十 佛刹上(文10) 「無量山光照寺」 (前略) 古假面一ヲ蔵ム 『豆州志稿』巻之十二(文10) 「武田信光五郎墓」 土人ノ傳説ニ云頼家修善寺ニ在ル時北條氏密ニ人ヲシテ漆ヲ温湯中ニ入レシム於テ是頼家、遍身漆瘡、面貌殊ニ醜シ北條氏誣ルニ悪疾ヲ以テス二位尼命シテホヲ刻シ面貌ヲ寫シテ鎌倉ニ齎シ到ラシム信光假面ヲ持シテ鎌倉ニ往ントシ至テ此ニ頼家弑セラルヽヲ聞キ憤怒ニ堪エスシテ自殺ス(中略) 又信光寺縁起ニ云伊澤信光鎌倉ヨリ頼家ノ病氣伺ヒニ往ク此ニシテ其変ヲ聞キ祝髪シテ守山ノ麓ニ庵ヲ結ヒ遁世シ文暦元年二月二十五日年七十五ニテ病卒スト(後略)
明治22年 (1889) 以前	『光照寺旧記 御面之由来』(文12) 「征夷大將軍源頼家公ノ病相」 竊に御面の由来を尋ね奉るに、鎌倉右大將頼朝公の御嫡子頼家公の御面相なり曾て御病惱の折節當國修禪寺の温泉に入らせ玉ふに、日を追て重らせ玉ふによつて、御母二位の尼御前の方に御病軀安否の御注進に斯の如く御面相を彫て御沙汰ありけるが、上使何某當所迄来られける程に、早や御他界被遊候よし急上使来たりたれば前の上使御面を當寺に納め置き、直に修善寺江立戻られたるとなん此故に當寺第一の重宝となし、古今尊重せしむるものなり。 附言言傳へによれば北条氏悪計に依て頼家公を廃しなきものにせんがため、わざと重患の容貌に彫刻し七日毎に鎌倉へ送りし最終の面相なりといふ、惣計十三ありしとなむ。

ない。面が寺宝となっているとも記されているから『建仁三年之始 頼家卿之修禪寺入湯記 略草』（以下『入湯記』）が記された嘉永頃には、二ノ舞の面があったことを思わせる（註6）。

（5）『光照寺旧記』文12 明治22年（1889）以前か

頼家が病気療養のため修禪寺の温泉に入ったが、日に日に病状が悪化したため、頼家は、顔を面に写して母政子（鎌倉）に届けさせた。使者が光照寺の近くまで来た時に、使者は頼家の死を知ると、面を寺（光照寺）に納め、修禪寺に戻った。また、言い伝えによれば、北条氏は頼家を亡き者とするため、重病の顔として面を彫り7日おきに鎌倉に送ったという。面は全部で13あり、寺に伝わる面はその最後の面だ。と記される。前述の『伊豆志』信光寺の項では「三七日三面づつ」すなわち、7日おきに1面づつ、計3面を鎌倉に届けたとあり『光照寺旧記』では面の数が増えている。

同書には「光照寺 伊豆菰山村寺家」黒印がある。印影にみえる菰山村は、菰山町と9か村が明治22年（1889）に合併したものだから、黒印は文書の下限を示すものと考えられる。

（6）『修禪寺物語 明治座五月興行』文13 明治44年（1911）

「修禪寺物語」の作者、綺堂が修禪寺にて「頼家の仮面」を見学した時の感想と、滞在していた新井旅館の主人から面の伝承を聞いたと記される。伝承は鎌倉方が頼家を毒殺しようと怪しい薬をすすめた結果、頼家の顔は爛れた。その顔を面に写して鎌倉に届けたのが寺に伝わる面だ。とされる。

（7）その他

面は林の中に捨てられてあったものを「最近」修禪寺に納めたものだという証言がある（修善寺町1959）。

『修禪寺物語 明治座五月興行』（以下『綺堂随筆』）から明治44年（1911）に綺堂が修禪寺で寺宝の頼家の仮面を見たから、綺堂の後に林に捨てたとは考えにくい。「最近」は『綺堂随筆』以前のこともなのかも知れず、明治初期の廃仏毀釈を想起させる。

5 ふたつの面のストーリー

面の伝承は、3寺に残る『入湯記』、『光照寺旧記』、

『信光寺縁起』と、『伊豆志』、『豆州志稿』、『綺堂随筆』、『修禪寺史料集』にみえた。

あらすじは、病気あるいは北条氏（時政）の陰謀により頼家の容貌が変わった。その顔を面に写し鎌倉（政子）に使者が届けることになったが、鎌倉へ向かう道中、守山付近（伊豆の国市守山付近）で頼家の死を使者が知るというものだ。使者の対応としては、①命を絶つ、②仏門に入る、③修禪寺に引き返すの3種がある。使者は、『光照寺旧記』以外は武田信光（伊沢）となっている。ストーリーを整理すると表3のとおりだ。

（1）頼家の体調変化の理由

- ①病気 『伊豆志』、『信光寺縁起』、『光照寺旧記』
- ②漆かぶれ 『豆州志稿』、『入湯記』
- ③怪しい薬 『綺堂随筆』

があり、時系列でみると、病気は享保期からあり、漆は寛政～嘉永期、怪しい薬は明治期という風に時期が降るにつれ頼家の体調変化に他者（北条氏）の関与が加わっていく印象がある。

（2）首謀者

漆、怪しい薬では、

- ①北条氏 『豆州志稿』
- ②北条時政 『入湯記』
- ③鎌倉 『綺堂随筆』

とあり、おおむね北条氏による陰謀とみられる点で一致しているようだ。

（3）面の制作主体

- ①頼家自ら刻んだ 『入湯記』
- ②政子 『豆州志稿』
- ③北条氏 『光照寺旧記』
- ④鎌倉 『綺堂随筆』

がある。『入湯記』以外はおおむね首謀者である北条氏が関与している点で一致をみる。

（4）面の届け先

- ①鎌倉 『伊豆志』、『綺堂随筆』
- ②政子 『光照寺旧記』、『豆州志稿』、『入湯記』

があり、受け手は鎌倉・政子で一致している。『信光寺縁起』のみ面の記載はなく、使者の行き先も他と逆で修禪寺となっている。

表3 頼家の面にまつわるストーリー

出典	原因	首謀者	制作主体	届け先	使者	使者の対応	面の数	対象面
伊豆志	1727年頃	病気		鎌倉	信光	切腹した	3	光照寺
信光寺縁起※	1800年以前			修禅寺	信光	仏門に入った		
光照寺旧記	1889年以前		北条氏	政子	上使何某	修禅寺に戻った	13	光照寺
豆州志稿	1800年頃	漆	北条氏	政子	鎌倉(政子)	信光	命を絶った	
修禅寺入湯記	1854年頃		時政	頼家	政子			修禅寺
綺堂随筆	1911年頃	怪しい薬	鎌倉	(鎌倉)	鎌倉			修禅寺

※鎌倉から修禅寺に向かう途中の頼末。面の記載なし。

(5) 使者

- ①武田信光 『伊豆志』、『信光寺縁起』、『豆州志稿』
 ②上使何某 『光照寺旧記』
 がある。

(6) 使者の対応

- ①切腹 『伊豆志』、自死『豆州志稿』
 ②仏門に入った 『信光寺縁起』
 ③修禅寺に戻った 『光照寺旧記』
 がある。

(7) 面の数

記述中に面の数が示されたものは、
 ①3面 『伊豆志』
 ②13面 『光照寺旧記』
 があり、後出すると考えられる『光照寺旧記』の方が面の数が増えている。いずれも7日おきに面を刻み鎌倉・政子に届ける点で共通している。

他方、当時の事実認識と考えられるものとして、享保期の『伊豆志』で修禅寺1面、光照寺2面とあったものが、寛政期の『豆州志稿』では、修禅寺、光照寺とも1面づつとなっているのは前述のとおり。また、嘉永期の『入湯記』には、二ノ舞の面の記述があり、修禅寺に現存する「頼家の仮面」が二ノ舞の面でないことを考えると別の面があったと読むこともできる。
 葦山町史では「源頼家公病相の面」について舞楽の

二ノ舞の面であること。七日毎に修禅寺から鎌倉に使者を送り、計13面あったとする伝承について、十王信仰や十三仏信仰の片鱗だとすれば、成立時期はさほど古いものではないとも類推する（葦山町 1988）。

(8) ストーリーの対象となる面

光照寺「源頼家公病相の面」を指した『光照寺旧記』と、修禅寺「頼家の仮面」を指した『入湯記』、『綺堂随筆』がある。『伊豆志』、『豆州志稿』は、信光寺の由縁を記すストーリーだが、いずれも同所で命を絶っているとするれば、位置関係から光照寺「源頼家公病相の面」にまつわるものと考えるのが自然であろう。

6 面伝承の素地

これら伝承は、修善寺の温泉が舞台となり、頼家の変貌の要因に病、漆、怪しい薬があり、その背後に鎌倉・北条氏の影が見え隠れすることが類似点である。頼家の修禅寺下向から死までの頼末は吾妻鏡からはほとんどうかがい知ることができないが、いくつかの記録にその様子が記されており、面伝承の素地となった可能性がある。

(1) 『愚管抄』文1 承久2年(1220)頃

病がもとで失脚し、修禅寺に幽閉、同所で刺殺されたと記す。頼家殺害の様子が「トミニエトリツメザリケレバ。頸ニ(緒)ヲ、ツケ。フグリヲ取ナドシテコ

表4 頼家修禅寺下向から死までの記録

文献	記事
愚管抄 (文1)	サテソノ十日頼家入道ヲバ。伊豆ノ修禅寺ト云山中ナル堂ヘヲシコメテケリ。頼家ハ世ノ中心チノ病ニテ。八月晦日ニカウニテ出家シテ。 (中略) 病ノナゴリ誠ニハカナハヌニ。母ノ尼モトリツキナドシテ。ヤガテ守リテ修善寺ニヲシコメテケリ。悲シキ事ナリ。 (中略) サテ次ノ年ハ元久元年七月十八日ニ。修禅寺ニテ又頼家入道ヲバ指コロシテケリ。トミニエトリツメザリケレバ。頸ニ(緒)ヲ、ツケ。フグリヲ取ナドシテコロシテケリト聞ヘキ。トカク云ウバカリナキ事ドモナリ。
吾妻鏡 (文2)	(建仁三年九月大) 廿九日、甲午、霽、左金吾禪室(頼家) 前將軍、伊豆國修禅寺に下向せしめたまふ、 (元久元年七月大) 十九日、己卯、酉剋、伊豆國の飛脚參著す、昨日十八日、左金吾(頼家) 禪間年廿三、當國修禅寺に於て薨じ給ふの由、之を申すと云々、
増鏡 (文3)	入道(頼家) は、かの病つくろはむとて、鎌倉より伊豆の国へ、リでゆあびにこえたりける程に、かしこの修善寺といふ所にて遂に討れぬ。一萬もやがてうしなはれけり。これは実朝と義時と一つ心にてたばかりけるなるべし。
北條九代記 (文4)	頼家卿出家流罪附千幡公家督並元服 將軍頼家卿の悪行重量し給ひしかば、心ならず御落飾し給ふ、御病悩の上には、国家政理の御事も終始尤も危く坐しますとて、尼御台所政子の御計らひとして、伊豆國修禅寺に御下向なし奉らる。(後略) 頼家卿薨去附実朝之御台下向鎌倉 (元久元年) 同七月十八日、実朝時政計らひ申して、修禅寺に人を遣し、頼家卿を浴室の内にして、潜に刺殺し奉る。御年末だ二十三才、一朝の露と消えて、敢なく名のみ残し給ひ、永く白日の下を辞して、一堆の塚の主となり給ひけり、哀れなりける御事なり頼家卿近習の輩、謀反の企露頭せしかば、北條相模守義時軍士を遣して誅せらる。
保暦間記 (文5)	同廿九日伊豆國修善寺へ移シ奉リヌ。然ル間時政將軍ノ執權トシテ天下ノ事執行フ。頼家猶謀反ノ間工有ケレバ。次年元久元年七月十九日廿三歳ニシテ。浴室ノ内ニテ打レ給フ。
鎌倉大日記 (文6)	建仁三年癸亥 九月頼家落飾下向伊豆修禅寺 元久元年甲子 七月十八日薨於修禅寺廿三才於浴室中被害
鎌倉將軍家譜 (文7)	(建仁三年九月) 頼家落飾、下向伊豆修禅寺 元久元年七月十八日、薨於修禅寺、才二十三、或日於浴室中被害

ロシテケリ」と凄惨さを伝える。

(2)『吾妻鏡』文2 正安2年(1300)頃

病がもとで失脚し、建仁3年9月29日修禅寺に下向、死去については、翌年元久元年7月18日に伊豆国からの飛脚により知らされたことのみを記す。

(3)『北条九代記』文3 元弘元年(1331)頃以降

頼家の悪行と病気が要因となり、政子により修禅寺に下向させられた。その後、実朝と時政が仕向けた刺客により浴室で刺殺されたと記す。

(4)『増鏡』文4 元弘3年(1333)～永和2年(1376)

病氣療養のため伊豆国へ下り、「リでゆあび」(出湯浴び)していたが、修善寺で討たれたと記す。頼家の嫡男一幡の死とともに、その背後に実朝と(北条)義時がいたことも記される。

(5)『保暦間記』文5 14世紀中頃

頼家が將軍にふさわしくないこと、病が悪化したため、失脚し、修善寺に下向した。北条時政は執權として政務を行っていたが、頼家に謀反の疑いがあることを聞いた。頼家は浴室で討たれたと記す。

(6)『鎌倉大日記』文6 14世紀末

建仁3年9月に頼家が落飾、伊豆修禅寺に下向したこと、元久元年7月18日に修禅寺にて浴室で殺害されたことが記される。

(7)『鎌倉將軍家譜』文7 寛永18年(1641)

『鎌倉大日記』とほぼ同内容が記される。

7 まとめ

頼家の面ふたつの概観とこれにまつわる伝承を整理

した。面は、舞楽面またはこれにルーツをもつものとした。修禅寺「頼家の仮面」は、類例に乏しく課題を残すが、地域色が加味された変容が進んだ納曽利面あるいはこれに類する面と考えた。一方、光照寺「源頼家公病相の面」は、二ノ舞の腫面にあたり、類似例も多数確認できることは先学の指摘（菰山町 1988）のとおりだ。

面の伝承。「頼家悪疾ノ面形」、「頼家面形当寺二面あり」と享保期には既に今日伝わる伝承が存在し、江戸中期～明治期の時間幅中で様々な要素が付加あるいは修補され、伝承が変容・派生した可能性がある。また、『入湯記』の記載と修禅寺「頼家の仮面」には齟齬があること、光照寺に頼家の面が2面あるとの『伊豆志』の記載など、第3、第4の面の存在をうかがわせる記述は非常に興味深い。

伝承の素地となったと思われる文献を列挙したが、『増鏡』に温泉療養の記述、『北条九代記』、『保暦間記』、『鎌倉大日記』、時代は下るが『鎌倉将軍家譜』に浴室内で殺害されたことが記されている。『北条九代記』、『増鏡』、『保暦間記』には実朝、義時、時政の関与が示唆されている。既に13～14世紀の文献に病氣、温泉、北条氏の陰謀といった面の伝承に関連する要素が見られることは興味深い。面の存在や、「漆」や「怪しい薬」といった記述は現状近世以降の文書にのみ認められることは留意しておく必要がある。

修禅寺及びその周辺には、面のほかにも頼家ゆかりの文化財が古今様々残されている。頼家が月を眺めたと伝わる月見ヶ丘、頼家が里の子ども達を大変かわいがったとの伝承にちなんで建立された愛童将軍地蔵、頼家が入浴したと伝わる筥湯、頼家の墓、彼の死後に謀反を企てたことが露呈し殺害されたと、殉死した

とも伝わる13人の家臣が眠る十三士の墓、無残に殺害された息子頼家の冥福を祈り母政子が寄進したとされる指月殿など、頼家に関連した文化財にまつわる伝承は同情や哀惜の心情に溢れている。

本稿は、面の由来や伝承の真偽の解明は意図していない。頼家の悲劇が伊豆でどのように捉えられ伝承されてきたのか、面が頼家の面として今日に伝えてきた伊豆の人々の心情に迫ったものである。

本稿の執筆にあたり、次の機関、方々に御協力、資料の提供をいただきました。記して感謝申し上げます。

伊豆の国市、伊豆市教育委員会、公益財団法人江川文庫、郡上市教育委員会、国東市教育委員会、光照寺、修禅寺、信光寺、白山文化博物館、相澤昂祐、今津和也、尾村宗一、神崎哲也、熊田慧照、鈴木雅士、中村伸吾、橋本敬之、藤尾祐之、牧野隆夫（協力機関等、協力者別 五十音順 敬称略）

註

- 1 文書類の本文中の出典表記は、文末表5のとおりとする。なお、『豆州志稿』は、秋山富南 原著『増訂豆州志稿・伊豆七島志』長倉書店 1967 年刊から原著部分を引用した。
- 2 舞楽の地方への波及に伴い、面本来の要素が失われる事例が報告されている。八幡神社例のごとく動眼、吊顎を省略したもの、周智郡森町天宮神社の納曽利面は、動眼、吊顎は持つが、両者は連結されていないものなどがあるとされる（西川 1971）
- 3 BS フジ『Time Trip 鎌倉幕府～悲劇の将軍と夜叉王の面～』（2022 年1月初回放送）番組内での牧野氏の所見と自然科学分析結果。牧野氏からは、面の計測値、類例の提供を受けた。
- 4 公益財団法人江川文庫所蔵の『伊豆志』（内閣文庫所蔵

表5 頼家関連文書一覧

表記方法	文書名等	引用元	表記方法	文書名等	引用元
文1	『愚管抄』	丸山 1949	文8	『伊豆志』	伊豆郷土研 1935
文2	『吾妻鏡』	龍 1940	文9	『信光寺縁起』※	秋山 1967
文3	『北条九代記』	早稲田大学 1912	文10	『豆州志稿』	秋山 1967
文4	『増鏡』	和田 1941	文11	『頼家卿之修禅寺入湯記 略草』	修善寺町 1959
文5	『保暦間記』	続群書類従完成会 1980	文12	『光照寺旧記 御面之由来』	獅子浜植松家文書
文6	『鎌倉大日記』	頼朝会 1937	文13	『修禅寺物語 明治座五月興行』	千葉 2007
文7	『鎌倉将軍家譜』	『鎌倉将軍家譜』 (京都大学附属図書館蔵)	※文10文書内からの引用		

明治八年抜抄本) 16 巻 伊東祐綱撰 中邨元起編 刊
(孔版) 管理番号 674 で確認したところ、「頼家面形当寺二
面あり」の「二面」の「二」は助詞に用いられる片仮名の「ニ」
とは明らかに書き分けられており(片仮名の「ニ」は小さ
く二本の線が短い)、明治期の翻刻に誤りがない限り、文
脈からも「頼家面形当寺に面あり」ではなく、面が2面あっ
たと読むことができる。

- 5 信光寺御住職によれば、『信光寺縁起』の委細は明らか
でないとのこと。
- 6 修禅寺は、文久3年(1863)の火災で堂宇を失っており、
二ノ舞の面が失われたとも考えられるが、享保期(伊豆志)
には寺宝として面1と記されており、辻褄が合わない。寛
政期(豆州志稿)の寺宝の中に「假面」とのみ記されるが、
数は1面と考えるのが妥当とすれば、二ノ舞の面の可能性
として浮かぶものとして、同じ頼家の面と伝わり、二ノ舞
の腫面である光照寺の面が想起される。何らかの経緯で嘉
永期に修禅寺にあったものか。憶測の域を出ない。

参考・引用文献等

秋山富南 原著 1967 『増訂豆州志稿・伊豆七島志』 長倉
書店
伊豆郷土研究会 1935 『伊豆志 全』 伊東祐綱著
修善寺町教育委員会 1959 『修禅寺史料集 一』
白鳥町教育委員会 1997 『岐阜白鳥町の彫刻 白山信仰と
造形』
続群書類従完成会 1980 『群書類従 第26輯』「保暦間記」
千葉俊二編 2007 『岡本綺堂随筆集』 岩波書店
西川杏太郎編 1971 『日本の美術7 No.62 舞楽面』 至
文堂
菰山町史刊行委員会 1988 『菰山町史 第4巻』「第二十一
節 光照寺」
丸山二郎 1949 『愚管抄』 岩波書店
頼朝会 1937 『鎌倉大日記』
龍肅 1940 『吾妻鏡(三)』 岩波書店
早稲田大学編輯部 1912 『通俗日本全史 第4巻 源平盛
衰記下 北条九代記』「北条九代記」
和田英松 1941 『増鏡』 岩波書店

以下、デジタルアーカイブ等からの引用

ColBase (<https://colbase.nich.go.jp>)

京都大学附属図書館蔵『鎌倉將軍家譜』